

『日本アジア研究』第9号(2012年3月)

## 相互作用における言語行動

——自他志向と言語行動の動機づけにおける社会的要因——

河 正一\*

本稿は、相互作用における言語行動のポライトネスと同時にインポライトネスを総合的に捉えられる新たな概念の検討を目的とした。そのため、Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論 (politeness) 及びインポライトネス理論 (impoliteness) を踏まえた上で、相互作用における言語行動の選択及び解釈の要因について、まず、われわれの内的要因として自己と他者における心理的欲求のあり方 (以下、自他志向とする) を考察した。続いて、内的要因に影響を与える外的要因として、言語行動の動機づけにおける社会的要因を抽出し、内的要因と外的要因の相互関連性について論じた。

社会における自己と他者は相互共存的・依存的な関係である故に、われわれの相互作用における言語行動の内的要因である心理的欲求には、「自己志向」と「他者志向」の2つの欲求を併せ持つ。すなわち、われわれは自己の領域を求め、心理的に自己に対する配慮を優先する自己志向と他者との肯定的な関係を求め、心理的に他者との融合を重視する他者志向をもつ。その上、内的要因に影響を与える外的要因の言語行動の動機づけにおける社会的要因として、力関係、社会的距離、利益、社会的規範を抽出した。その内的要因である自他志向と外的要因の言語行動の動機づけにおける社会的要因の総合的な調節としての「振る舞い」が選択される。

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論のフェイス概念をより広く捉えた自他志向による振る舞いの概念を用いることで、Culpeper (1996) が挙げたインポライトネス・ストラテジーの動機づけを含め、相互作用における言語行動の全般にわたって考察することが可能であることを示した。

**キーワード:** 自己志向, 他者志向, 振る舞い, 利益

### 1 問題の所在

社会における相互作用としての言語生活について、言語学の中でも、とりわけ言語哲学及び語用論の領域では、人々の発話行為に対する様々な疑問を投げかけ、その究明に努めてきた (Austin の *How to Do Things with Words* (1962) をはじめ、Searle (1969/1986) や Grice (1989/1998) や Leech (1983/1987) や Brown & Levinson (1987) (以下 B&L と略記) など)。Grice (1989/1998) は、人々の言語生活において協調の原理を唱え、その本質はそれが社会的なゴールという言語外的な形で動機づけられているという。Leech (1983/1987) は、丁寧さの原理こそ社会的な均衡と友好的な関係を維持するという。つまり、両者

\* ハ・ジョンイル, 埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程在学中, 日本語学

は人々が互いに協調・丁寧さの原理に従って発話行為を行うことこそ、社会構成員として果たすべき役割であるということを前提している。

一方、B&L (1987) は、フェイス (face-wants) の概念を用いて、行為者は規範に従いながら行為すると同時に、自らの意図の下に振る舞いを選択し、その振る舞いを選ぶとして、フェイスと社会規範との関わりを唱えている。B&L 理論は、行為及び行為者の合理性という観点から言うと基本的には Grice と同じ前提であり、その前提からの逸脱の原理をポライトネスに求めるという点では Leech と等しい。すなわち、人々の自己に対する欲求と社会的規範の遵守による合理性からポライトネス理論という個人的方略が導かれるとする。

ところが、B&L (1987) のみならず、多くの言語研究は理性による合理主義に基づいた研究が大半であった。理性に基づいた合理的な言語使用という前提からの多くの研究は<sup>1)</sup>、客観主義のもとに事物を対象化し、冷静な観察、分析を基盤として論理的に考察することを必要とした。人々の相互作用における各々の理性に基づいた推論を通して達成される論理的言語分析は、意図的であれ非意図的であれ、相手に対する失礼・無礼を与えてしまう言語使用の研究<sup>2)</sup>を排除してしまう。というのは失礼、無礼、非難などといった言語行動には理性及び合理性から逸脱する要因、すなわち非合理的な自己志向及び感情的な要因が多く内包されているからであろう。しかし、相互作用における言語行動には、相手に対するポライトな側面だけではなく、インポライトネスという側面も多く見受けられる。また、ポライトネスの研究だけが円滑なコミュニケーションの遂行に役立つと思われがちであるが、相互摩擦を引き起こすインポライトネスを明らかにすることで、円滑なコミュニケーションの手本を示すことができる。

本稿は、相互作用における言語行動のポライトネスと同時にインポライトネスを総合的に捉えられる新たなフェイス概念の検討を目的とする。そのためには、人々の内的要因である心理的欲求及びその内的要因に影響を与える外的要因を明らかにし、相互関連性を究明していく必要がある。以下、2 節では B&L のポライトネス理論及び Culpeper (1996) のインポライトネス・ストラテジーについて検討する。3 節はまず、相互作用におけるわれわれの内的要因として自己と他者における心理的欲求のあり方を考察する。続いて、その内的要因に影響を与える外的要因として、言語行動の動機づけにおける社会的要因を抽出し、内的要因と外的要因の相互関連性について論を進める。

## 2 ポライトネス理論及びインポライトネス理論の問題点

B&L 理論では、われわれすべての社会構成員は 1 つの自然言語を意図的かつ流暢に話せる資質を備えており、さらに 2 つの特性を持つと想定し、1 つは、フェイスであり (ネガティブ・フェイスとポジティブ・フェイス)、もう 1 つは、目的に対する手段を考える理性的能力とする。協調の原理の持つもっとも効率的な合理的原則に従わずに、非合理的な発話表現を使う主たる一般的動機とはポライトネスであり、様々な言語で観察されるそうした言動の共通点は参加者のフェイスに対する方略的配慮であるとする。その中でネガティブ・フェイスとは個人の領域や権利などに対する侵害を拒否することで、ポジティブ・フェイスは好ましいとされる前向きな自己像の容認を求めるという。

B&L は、フェイスの規定と共に、フェイスを脅かすような行為を Face Threatening Act (以下、FTA と呼ぶ) と呼び、「 $W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$ 」のように公式化した。ある行為  $x$  が相手のフェイスを脅かすその度合い ( $W_x$ ) は、 $x$  という行為が、ある特定文化の中でどのぐらい相手に負担をかけると見なされているかをいう「行為  $x$  が、相手にかける負荷度 ( $R$ )」と、話し手と聞き手の「社会的距離 ( $D$ )」(対称的關係)、聞き手の話し手に対する「相対的力 ( $P$ )」(非対称的關係) の 3 要因が関数的に働いて決まってくるという。

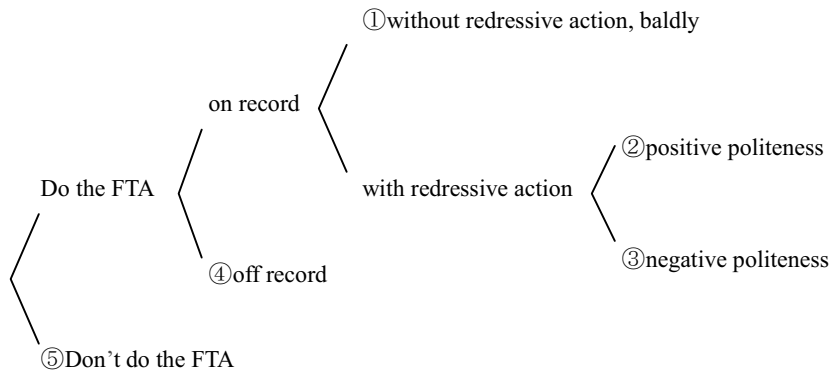


図 1 Possible strategies for doing FTAs (B&L 1987: 69)

また、行為者はフェイスを失うリスクの見積もりの状況によって、相手のフェイスを脅かす可能性がきわめて小さい場合、図 1 の①の補償行為をせず、ありのままに言い、そのフェイスの侵害の度合いにつれてフェイス侵害の軽減を行う②、③、④のストラテジーを選び、その侵害の度合いが最も大きい場合には行為を行わない、いわゆる⑤の回避を選ぶとする。さらに、②、③、④の主なストラテジー<sup>3)</sup>を中心に論を展開する。

B&L のポライトネス理論に対し、Matsumoto (1988) 及び井出 (2006)<sup>4)</sup>などは日本語の敬語使用の規範的な使用の観点を取り上げ、英語のネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとしての敬意を払う動機づけとは異なっているとし、B&L のフェイス概念の普遍性に異議を唱えた。また、林 (2005) は B&L 理論を踏襲しつつ、彼らのフェイス概念に社会での役割や地位が要求するフェイスの規範的な側面を取り入れた、フェイスの普遍的概念を提案<sup>5)</sup>した。

宇佐美 (2001) は B&L のポライトネス理論を高く評価するが、幾つかの問題点を指摘する。とりわけ、「特にポライトでもないが、失礼でもない」言語行動や「ポライトでない」言語行動、つまり「インポライトネス」の扱いが提示されていないため、その位置づけが困難であり、話し手に焦点を当てたものになっているので、聞き手がどのように受け取るかといった話者の相互作用の観点が十分に取り込まれてないとし、B&L 理論の問題点を解決するため、「円滑なコミュニケーションのための言語行動」の「ディスコース・ポライトネス」を提案している。

宇佐美 (2001) 及び Eelen (2001) などの指摘のように、相互作用における言語行動のあり方を考察するためには、ポライトネス (politeness) と同時にポ

ライトではない (impoliteness) 両側面を考慮しなければならない。そのためには、人々の内的要因である心理的欲求及びその内的要因に影響を与える外的要因を明らかにし、相互関連性を究明していく必要がある。ところが、相互作用における合理的な行為者という前提<sup>6)</sup>のポライトネス理論では、意図的であれ非意図的であれ、相手のフェイスを脅かしてしまうインポライトな言語行動の個々の現象は説明できるかもしれないものの、全体のメカニズムに関しては説明できない。

仮に、何らかの目的をもって意図的に相手のフェイスを脅かすもしくは侵害するということがインポライトネスであるとしよう<sup>7)</sup>。B&L 理論における、相互作用の力関係は小さく、社会的距離が大きい状況では、例 1 は 1.2 と 1.1 に比べ、相手に対する補償行動を十分に果たしていないため、インポライトネスの度合いが高くなる。

例 1 ドアを閉める。

1.1 ドアを閉めて下さい。

1.2 ドアを閉めていただけないのでしょうか。

しかし、より典型的なインポライトネス<sup>8)</sup>と思われる、人に直接、非難、悪口、脅迫などといったフェイスを脅かす例 2~2.2 の場合は、その話し手のどちらのフェイスに基づいて発せられた戦略であろうか。相手に補償行為をせず、あからさまにいう戦略は上記の図 1 から見ると相手に対するフェイスを失うリスクの見積もりが最も小さい場合であり、その逆の見積もりでは FTA を行わないということになっているが、例 2~2.2 は補償行為をせず、あからさまに相手のフェイスを最大限に脅かしてしまうため、どちらにも該当しない。故に、インポライトネスの枠組みが単なる B&L のポライトネス理論の逆様ではないという Culpeper ら (2003: 576) の指摘は<sup>9)</sup>、妥当であり、ポジティブ及びネガティブ・フェイスの定義からその原因を導き出すことができないと思われる。

例 2 こんなことも出来ない。

2.1 お前は本当にどうしようもない奴だ。

2.2 失敗したら殺すぞ。

無論、B&L (1987: 58) は人々が皆、常に合理性とフェイスを備えた行為者であるとはしないが、それにもかかわらず、理性的なおかつ合理的な行為者があからさまに相手のフェイスを脅かすというのはそもそも、矛盾してしまうのではないか。つまり、理性に基づいた合理的な行為者 (rational agents) のフェイスの規定から出発する B&L 理論では、自己中心的で感情的とも思われるインポライトネスの要因が自然に排除されてしまう。ポライトな言語行動の分析が主眼である B&L 理論では、非合理的及び自己志向的な発話が多く含まれていると思われる悪口、非難、侮辱、嫌味などといったインポライトな言語行動の究明には適切ではない。にもかかわらず、インポライトネス研究の中では B&L のフェイス概念をそのまま用いて、2 つのフェイスからインポライトネス・戦略を分析する傾向がみられる。Culpeper (1996) はインポライ

トネス・ストラテジーについて、B&Lの図1のFTAを行うための可能なストラテジー (possible strategies for doing FTAs) から、次の5つに分類を行った。

①Bald on record impoliteness

直接的に、あからさまに相手のフェイスを脅かす。

②Positive impoliteness

同情・関心を示さない。共同体であることを否定する。相手の敏感な話題を取り上げる。タブーなことを言う。別の名前と呼ぶなど。

③Negative impoliteness

不利益なことが起こることを注ぎ込む。相対的な力を強調する（威張る、軽蔑する）。Hに負債があることを明示的に言う（SのHに対する恩着せがましくふるまうこと）など。

④Sarcasm or mock politeness

皮肉あるいは偽りのポライトネスを使用する。

⑤Withhold politeness

ポライトな言語行動が期待されている場面で、ポライトな言語行動を避ける。たとえば、誰かにプレゼントをもらったにもかかわらず、お礼を言わないこと。

上記のストラテジーのうち、①bald on record impolitenessは、話し手の聞き手へのフェイスに対する配慮がない場合で、B&Lのあからさまに言う (without redressive action, baldly) とはその性質を異にする<sup>10)</sup>。②と③は各々、相手のポジティブ・フェイスとネガティブ・フェイスを脅かすストラテジーを言い、④は、Leech (1983/1987) のアイロニーと冷やかしにあたる皮肉あるいは偽ポライトネス (厳密に言うと mock politeness とは日本語のからかいにあたる) を指し、⑤はポライトネスを避けるストラテジーである。しかし、Culpeper (1996) のインポライトネス・ストラテジーはB&Lのフェイス概念に対する考察がないため、ある行為者のストラテジーの分析はできるものの、行為者の動機づけまでには至らない。とりわけ、①bald on record impoliteness はどちらのフェイスに基づいたストラテジーかについて説明できない。

今野 (1988: 11) は蔑視語について、他者との差異を強調する優越感の具体的な言語シンボルという捉え方をする。例3のように、相手に対する蔑視、侮辱、軽蔑、偏見、差別などといった言い方は、行為者の優越感から相互の融合・調和を求めず、自分の領域からの排除、いわゆる相手の否定がその根源をなし、FTAの度合いは非常に高い。このような話し手の優越感から発せられた発話をB&Lのネガティブ・フェイスから導き出すことができるだろうか。相手を支配したい、相手の上に立ちたいという欲求から発せられた発話を、理性的かつ合理性を重視するB&Lのフェイスに基づいた発話であるとするのは、果たして妥当であろうか。故に、フェイスに関する再考察を行うべきであろう。

例3 父が戦死して貧しかった私に、小学校低学年の担任は「きたない」など差別的な言葉を投げつけた。(朝日新聞 2005.02.20)

以上、相互作用における言語行動のポライトネスと同時にインポライトネス

を総合的に捉えるため、B&L 理論及び Culpeper (1996) のインポライトネス・ストラテジーについて検討を行った。インポライトネスの多くの言語行動は、B&L の理性及び合理性のフェイス概念に反するものが多く存在する。故に、感情的・非合理的な要因が多く内包されているインポライトネス・ストラテジーに B&L のフェイス概念をそのまま適用するのは適切ではない。したがって、次節では、ポライトネスと同時にインポライトネスを総合的に捉えるため、われわれの相互作用における内的要因として、自己と他者の心理的欲求のあり方を考察する。さらに、その内的要因に影響を与える外的要因の言語行動の動機づけにおける社会的要因を抽出し、相互関連性について論を進める。

### 3 自他志向

#### 3.1 自他志向と振る舞い

社会構成員として、自己と他者はどのような相互関係をもつか。その自己と他者とのあり方を捉えた上で、相互作用における言語行動の自己と他者の心理的欲求を考察する手続きが必要であろう。

まず、自己と他者のかかわりについて、Lovejoy (1961/1998: 94) は自己意識の確立が他者認識を通じて形成されるという。このことは自我の発達は社会集団のなか、とりわけ他者との関係においてのみ存在するという Mead (1924/1991: 48) の考え方も相通じる。自己と他者は相互共存的・依存的関係である故に、人々の何らかの判断の過程では、意識的であれ無意識的であれ、自己に対する他者及び集団との比較及び照合に通じた判断が導かれる。つまり、自己に対する認識は結局、他者との関わりをもつ社会的な所在の中から認識される。

そういう意味で相互のフェイスの尊重を社会的な所在の中から求める Goffman (1982/2002) のフェイスは妥当である。しかし、儀礼としての相互行為を強調し、自分自身に要求する積極的な社会的価値だけを重視したため、その狭隘さは否定できない。なぜなら、われわれの心理的欲求には積極的な社会的価値にそった欲求もあれば、社会的な価値に反発するもしくは背く欲求もあるからである。では、相互共存的・依存的である自己と他者はお互いに対し、如何なる心理的欲求を持つだろうか。さらに、自他志向(相互作用における自己と他者との心理的欲求のあり方を「自他志向」とする)とフェイスはどのような関連性を持ち得るか。

筆者は、われわれの相互作用における言語行動の内的要因である心理的欲求には、「自己志向」と「他者志向」の2つの欲求があると提案する。自己と他者は互いの主体として、流動的に自己と他者との関係の認識から言語行動を取っていくのは言うまでもない。その際、互いの自他志向の衝突の危険性を如何に緩和するかもしくは強調するかによって現れる、すなわち相互行為における自他志向の調節として現れるその時その場の当人の自他志向の現れを互いの「振る舞い」<sup>11)</sup>とする。つまり、相互作用における内的要因の心理的欲求と外的要因の言語行動の動機づけにおける社会的要因との調節として「振る舞い」が選択されるが、相互の「振る舞い」は相互関係の展開と共に総合的かつ流動的に変化していく。故に、自己志向と他者志向の調節として現れる振る舞いが必ず、互いの立場を守るとは限らない。自己志向と他者志向について具体的に

は下記の通りに記述する。

自己志向：自己の領域を求め、心理的に自己に対する配慮を優先する欲求。  
 他者志向：他者との肯定的な関係を求め、心理的に他者との融合を重視する欲求。

すなわち、人間の根底にある自己に対する「自己志向」の欲求とは自己中心性及び自己愛とも言える欲求であり、カントが言う所有欲、支配欲、名誉欲といったものに代表される<sup>12)</sup>。これに対して「他者志向」という欲求は他者に対する思いやり、同情といった性質であり、人が他者との触れ合いを通して感じる喜びや楽しみという欲求である。

Mead (1924/1991) は自我には2つの側面があるとし、1つは主我 (I) であり、もう1つは客我 (Me) で、客我とは他者の期待をそのまま受け入れたものであり、主我とはその客我に対する反応である。客我が自我の社会性を表し、主我が自我の主体性を示すことになり、自我はこの客我と主我とのかかわりから成り立っているという。上記の自他志向のうち、自己志向の方が人間の主体性を示し、他者志向が社会性を表すとも言い換えられる。

では、自他志向による振る舞いを規定することで、如何なる利点が考えられるか。例4, 5はCulpeper (1996) のあからさまに相手のフェイスを脅かすストラテジー (bald on record impoliteness) として考えられる。しかし、例4, 5を理性に基づいた合理性の前提から出発するB&L (1987) のフェイス概念から分析を行うのは、前節で検討したように妥当ではない。一方、「自他志向」は人の心理的欲求のあり方であり、「振る舞い」は心理的欲求と社会的要因との競合の結果として現れるため、儀礼的な部分だけではなく、非儀礼的な危険性も同時に内包されている。故に、行為者の自己志向に動機づけられた「振る舞い」は例4, 5のように、他者を脅かす場合が多く、一方、他者との肯定的な関係を求めて、相手を慰めたり、勇気づけたり、仲間であることを強調したりする他者志向による「振る舞い」は相互の配慮につながり、ポライトネスとして認識されやすい。

例4 先夜のボクシングWBC世界フライ級タイトルマッチでの挑戦者・亀田大毅選手の反則はひどかった。試合前も、世界チャンピオンの内藤大助選手に対する敬意のカケラもなく、「ゴキブリ」呼ばわりなど無礼な言葉に許せない怒りを覚えた。(朝日新聞 2007.10.20)

例5 所持品検査と称し、胸やしりなどを触られたり、「お前は人間のクズだ」などと侮辱されたりしたとしている。(朝日新聞 2000.05.18)

さらに、B&L理論では「互いのフェイスを保つ」というストラテジーが合理的かつ理性的であり、相互の利益にかなうとする。ところが、例6のように特に親しい間柄における助言及び忠告は、互いのフェイスを保つストラテジーより、多かれ少なかれ、相手のフェイスを脅かすストラテジー<sup>13)</sup>がよく使用される。故に、互いのフェイスを保つということが合理的かつ理性的であり、相互の利益にかなうとは言い難い。また、相手のフェイスを脅かさないように装って実は脅かす慥慥無礼というストラテジー<sup>14)</sup>の例7は、B&L理論では説明

しきれない。Culpeper (1996) は例 7 にあたるストラテジーを皮肉あるいは偽ポライトネス (sarcasm or mock politeness) とする。例 7 は相互作用における望ましい振る舞いを意図的に逸脱する、すなわち相互の融合を重視する仲間意識から外れた丁寧なことばを用いるストラテジーである。話し手の相手に対する距離を置く過剰な敬語使用は相手への敬遠を生み、その敬遠は女子大学生の級友に対する話し手の優越感から起因する。故に、相互の肯定的な関係及び調和を求めるのではなく、自己の領域から他者を遠くに置く例 7 は、自己志向に動機づけられた発話という解釈を導き出される。

例 6 「こんな毎日に、生きている意味があるのかしら」。そうつぶやく妻に、男性は「バカなこと言うな」と声を荒らげる—あの日を境に、そんな日々が続いている。(朝日新聞 2007.09.30)

例 7 都内の私立女子大に籍を置き、意中の大学を目指して仮面浪人している A 子さんは学校で意識して慇懃無礼を演じる。「うちのお父さんが」なんていう級友に交じり、一人「私の父は」を貫く、といった具合だ。私ってあなたたちとは違うのよってという意識だ。(朝日新聞 1999.11.29)

以上、ポライトネスに動機づけられた言語行動は我々の言語生活の多様な言語行動の一部に過ぎない。社会構成員として互いのフェイスを維持する B&L のポライトネス理論は社会言語学の観点から重要である。しかし、われわれの日常の言語行動には、相互の肯定的な関係を破り、相互の望ましい立場を脅かしてしまうインポライトネスの言語行動も多く潜んでいる。故に、ポライトな言語行動に焦点をおいた B&L のフェイス概念だけでは、私たちの言語生活の全般にわたった根源的な答えを求めることはできない。しかし、自他志向の現れとしての「振る舞い」を用いることによって、Culpeper (1996) が挙げたインポライトネス・ストラテジーの動機づけの説明を含め、相互作用における言語行動の全般にわたって考察することが可能であることを示した。

### 3.2 言語行動の動機づけにおける社会的要因

本節では上記の言語行動の内的要因に影響を与える外的要因の社会的要因について考察する。それに先立って、なぜ、外的要因である言語行動の動機づけにおける社会的要因の分析が必要であろうか。

Searle は下記のように述べ、私たちの自由の意志の存在が行動の選択に与える役割を説明する。

自分自身の行為について私の気づくかぎり、私の様々な信念や欲求は、私がある特定の仕方で行動することを引き起こすことはない。むしろ、どの欲求を踏まえて行為するか、私が選ぶのである。つまり、多くの原因のうちどれに効力があるか、私が決めるのである。(Searle, 2001/2008: 68)

いわゆる多様な社会的要素 (例えば、地位、ジェンダー、友情、権威、年齢など) の中で、どれを重要であると見なして言語行動を取るかは当人のその時の自由な選択である。しかし、その自由な選択と共に、自由な選択の間違いに



よる処罰も常に随伴され、意図的であれ非意図的であれ、相手を脅かした場合、相手の反発により、それ以上の攻撃を受ける可能性が高く潜められている（例えば、通行人に「ちょっと、どいていただけませんか」を言うか「おい、どけー」と言うかは当人の自由の選択であるが、後者の選択には非常に高い危険性が内包されている）。故に、相互作用における言語行動の選択及び解釈には、自他志向に影響を与える社会的要因の分析が不可欠であり、2つの要因の相互関連性を究明する必要がある。

B&L (1987) は、図 1 の FTA を行うための可能なストラテジーを選択することで、様々な利益が得られるとする。オン・レコード (on record) を選択することで効率という利益を得られ、オフ・レコード (off record) の選択はオン・レコード選択なら避けたい行為の責任を回避することができる。また、補償行為を行う 2 つのストラテジーのうち、まず、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーの選択は聞き手のポジティブ・フェイスを満足させ、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの選択は聞き手のネガティブ・フェイスを満足させる（ある程度償う）利益が得られるという。その上、FTA 公式における「力関係 (P)」「社会的距離 (D)」「行為 x が、相手にかける負荷度 (R)」を取り上げ、各々の要因がポライトネスのレベルの決定に寄与するという。

FTA 公式の 3 つの要因のうち、「力関係」と「社会的距離」の要因は日本語学・国語学の敬語及び待遇表現の研究分野で、常に対人関係における上下及び親疎という要因として、取り上げられてきた（故に、本稿では割愛する。詳細は、南 (1987) を参照されたい）。ところが、「行為 x が、相手にかける負荷度 (R)」という要因は、行為者が利益を得るために駆使する補償行為である。すなわち、B&L の補償行為 (redressive action) とは、その FTA が引き起こす可能性のある相手のフェイス損傷を和らげようとする行為であり、その根源的な目的は行為者の利益である。したがって、「行為 x が、相手にかける負荷度 (R)」の要因より、「行為 x の相互作用における利益」という要因が言語行動の動機づけにおける社会的要因として当を得る。

利益という要因を取り入れ、「丁寧さの原理」を唱えたのが Leech (1983/1987) である。彼は丁寧さの原理に属する原則として、次の 6 つを挙げた。

- (I) 気配りの原則（行為賦課型<sup>15)</sup>と行為拘束型<sup>16)</sup>において）
  - (a) 他者に対する負担を最小限にせよ。(b) 他者に対する利益を最大限にせよ。
- (II) 寛大性の原則（行為賦課型と行為拘束型において）
  - (a) 自己に対する利益を最小限にせよ。(b) 自己に対する負担を最大限にせよ。
- (III) 是認の原則（表出型と断定型<sup>17)</sup>において）
  - (a) 他者の非難を最小限にせよ。(b) 他者の賞賛を最大限にせよ。
- (IV) 謙遜の原則（表出型と断定型において）
  - (a) 自己の賞賛を最小限にせよ。(b) 自己の非難を最大限にせよ。
- (V) 含意の原則（断定型において）
  - (a) 自己と他者との意見の相違を最小限にせよ。(b) 自己と他者との含意を最大限にせよ。
- (VI) 共感の原則（断定型において）

(a) 自己と他者との反感を最小限にせよ。(b) 自己と他者との共感を最大限にせよ。

上記の 6 つの原則は基本的に相手の利益を損なわないことが「丁寧さの原理」であるとする。すなわち、B&L 理論の相手へのフェイスの配慮であれ、Leech の丁寧さの原理であれ、話し手と聞き手もしくは自己と他者との利益をめぐる方略に帰結される。

では、典型的なインポライトネスの言語行動における利益という要因はどのような役割を果たすのであろうか。Searle (1969/1986: 104–105) は約束と威嚇との決定的な相違は、約束が相手に味方してなにごとかを行うという誓約であり、相手に敵対してそのことを行うという誓約でないのに対し、威嚇は相手に敵対してなにごとかを行うという誓約であり、相手に味方してそのことを行うということではないという点である。故に、例 8 は威嚇であるという。Searle のいう「なにごとかを行う誓約」というのは本質的に相手に対する利益か不利益かにつながるわけである。このことはほめる言語行動と非難・侮辱する言語行動においても同様であり、相手に心理的利益を与えるか否かがインポライトネスの判断基準として働く。故に、対人関係における相互の望ましい立場のあり方に対する配慮は相手の心理的利益につながる。一方、相手を非難・侮辱する振る舞いを示す例 9、10 は相手に心理的不利益を与えるため、われわれはインポライトネスとして捉える。つまり、ある言語行動がポライトネスであるかインポライトネスであるかの判断基準に、相互作用における「利益」という要因が作用している。

例 8 君が期限を守ってレポートを提出しないならば、私は君にこのコースで落第点をつけることを約束するよ。

例 9 在学中、指導教官の准教授から「お前らは最低の人間」というメールを送られ、提出した論文に対し「なんでこんな構成なん。あほちゃうか」などと非難されたため、うつと診断されて留年・休学を余儀なくされたと主張している。(朝日新聞 2010.08.04)

例 10 判決によると、A 被告は昨年 9 月、岡山市福浜町の飲食店で、店長(当時 47)に「店をやめてよかったね。おかげで忙しくなったよ」などと言われ、侮辱されたと激高。牛刀で店長の左胸を刺して殺害した。(朝日新聞 2001.03.30)

さて、内的要因の自他志向に外的要因の「利益」はどのように反映され、言語行動として示されるか。三宅 (1994) の研究に照らし合わせて考察を行ってみる。三宅は一般に、言語表現と対人距離の関係は、距離が大きいほど丁寧になると考えられがちであったが、ウチとソトに比べて、ヨソは心理的距離からいえば、話し手から最も遠い位置にあるにもかかわらず、待遇度と言語表現はウチとソトに対するものの中間に位置するという。その理由について、三宅はヨソの人間がもつ基本的要素として、「不確実性」と「無関心」を抽出した。これらの 2 つの要素をもったヨソの人間に対して日本人は「不確実性」を強く感じる場合には、ヨソの人間に対して比較的丁寧な待遇したり丁寧な表現をしたりするという安全な方略を取る。一方、「無関心」の気持ちが強いと、どう

評価されようと自分には影響がないので、不躰で、迷惑を考えない態度を示すからであるという。

筆者から見れば、通常、自己とヨソの関係とは社会的規範に逸脱しない限りでの行動だけをお互いに求める関係であるため、距離を縮めようとしなない。そのことは相互作用として自己と利害関係が生まれる見込みがあまり期待されないことであり、利益という動機づけの要因から三宅（1994）の「不確実性」と「無関心」という2つの要素が導き出される。つまり、相互作用における利益の見込みの「不確実性」がおのずとヨソの層への「無関心」につながるわけであり、その根底には利益という言語行動の動機づけにおける社会的要因が作用している。

以上、筆者はわれわれの言語行動の選択及び解釈における外的要因として力関係、社会的距離、利益を言語行動の動機づけにおける社会的要因とする。さらに、それら3つの要因に社会的規範<sup>18)</sup>という要因を付け加えることで、異文化接触における言語行動の分析を可能にする。これら外的要因の社会的要因は内的要因であるわれわれの自他志向の調節に影響を与え、自己志向と他者志向の総合的な調節として「振る舞い」が選択される。故に、これら要因は相互言語行動の進め方、いわゆるコミュニケーションの遂行の展開によって、各要因の役割及び重要度を流動的・総合的に捉えるべきである。

#### 4 おわりに

本稿は、B&L のポライトネス理論及びインポライトネス理論を踏まえた上で、相互作用における言語行動のポライトネスと同時にインポライトネスを総合的に捉えられる新たな概念の検討を目的とした。B&L 理論は理性に基づいた合理的な行為者のフェイスの前提から出発する。故に、非合理的な自己志向及び感情的な要因が多く内包されている Culpeper (1996) のインポライトネス・ストラテジーの分析に、そのまま適用するのは妥当ではない。その結果、次のような自他志向による「振る舞い」という概念を導き出すことに至った。

社会における自己と他者は相互共存的・依存的な関係である故に、われわれの相互作用における言語行動の内的要因の心理的欲求は、「自己志向」と「他者志向」の2つの欲求を併せ持つ。すなわち、われわれは自己の領域を求め、心理的に自己に対する配慮を優先する自己志向と他者との肯定的な関係を求め、心理的に他者との融合を重視する他者志向をもつ。その内的要因に影響を与える外的要因の言語行動の動機づけにおける社会的要因として、力関係、社会的距離、利益、社会的規範を抽出した。

そこで、内的要因である自他志向と外的要因の言語行動の動機づけにおける社会的要因の総合的な調節として、その時その場の「振る舞い」が選択される。B&L のポライトネス理論のフェイス概念をより広く捉えた自他志向による振る舞いの概念を用いることで、Culpeper が挙げたインポライトネス・ストラテジーの動機づけを含め、言語行動の全般にわたって考察することが可能になると思われる。

今後は自他志向の概念をインポライトネス及び対立する場面における言語方略などといった分析に応用する必要がある。日本語における個人的な方略としてのインポライトネスだけではなく、社会的規範から見たインポライトな言

語行動に関する研究(Culpeper, 2010), 相互の立場を脅かす脅威と反応(Limberg, 2009) など, 様々な研究を行う必要がある。相互作用におけるポライトな側面だけではなく, 相互摩擦を引き起こすインポライトネスのメカニズムを究明することで, 円滑なコミュニケーションの手本を示すことができる。

このように対人関係における方略の分析には, 宇佐美 (2006), 三牧 (2008) のいう, 相互行為における一連の談話だけを切り取って解釈するだけではなく談話全体の展開も含めて分析することが必要であろう。談話全体を視野に入れ, 談話の展開に沿うトータルな捉え方をすること, すなわち, ミクロな視点と共にマクロな視点を取り入れて相互言語行動における方略全体を捉える必要がある。

## 注

- 1) メイナード (2000) は, 西洋の近代学問のデカルト哲学の科学的合理性を重要視する言語学と感情・情意に関する言語学の系譜を紹介している。しかし, 多くの言語研究が前者のほうに偏ってきたと指摘する。詳細はメイナード (2000) を参照されたい。
- 2) 近頃, 英語圏では, Culpeper (1996, 2010) をはじめ, Culpeper, Bousfield & Wichmann (2003), Locher & Bousfield (2008), Limberg (2009) など, インポライトネスに関する多くの研究が発表されている。しかし, 日本語学・国語学ではいまだに, インポライトネスに関する研究はほとんど行われていない。
- 3) B&L はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを 15 (聞き手の興味・欲求などに気付いて注意を向ける, 聞き手に対する賛成・共感などを強調する, 一致を求める, 冗談を言う, 申し出る・約束する, 相互関係であることを主張するなど), ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを 10 (慣習的な遠まわしをする, 質問する・曖昧化する, 敬意を払う, 謝罪する, 名詞化する, 借りを負うこと・相手に借りを負わせないことを言明するなど), オフ・レコード・ストラテジーを 15 (ヒントを与える, 暗示的に手がかりを与える, 誇張する, アイロニーを言う, 省略を使って不十分にするなど) 挙げている。
- 4) 井出 (2006) は, Lakoff (1973), Leech, B&L らの個人的な目標を達成するために適切な方略やルールを採用する「合理主義的」行き方を「働きかけ (volition)」とし, 日本の社会における相互作用において際立ったポライトネスの構成要因として働く「わきまえ (discernment)」との区別が抜け落ちているという。つまり, 命題内容の伝達における日本語の敬語体系の使用は選択の義務が伴うことであり, 日本社会ではその都度, 時と場と自分と相手の立場の距離を「わきまえ」た言語使用が優先されることを主張している。わきまえとは, 社会的にこれはこういうものだと認められているルールにほとんど自動的に従うことを意味し, それは言語行動についても非言語行動についても言えることであって, これをひとことで言い直すと, 期待されている基準に従うということであると定義し, 「わきまえ」は B&L の「話し手の意志により相手に働きかけ」の意思的方略選択と異なり, 「世の中はこういうものだからと認識して社会の期待に沿うように言語を使うことである」とする (井出, 2006: 115)。この井出の主張に対して滝浦は「ゴフマンの相互行為儀礼とブラウン&レビンソンのポライトネスもまた, 受動的でありかつ能動的であるような両義性を帯びている。この二面性は, ポライトネスの内実を理解するのに欠かせないばかりか, 彼らのポライトネス理論の成り立ち自体にもかかわり, また彼らに対する誤解に基づいた批判の原因ともなっている」という。人がつねに発話行為の意味を意識しているわけではなく, 行為には, 話者が「選ばされるもの」としての

受動性と「選び取るもの」としての能動性との2つの極があり、前者がポライトネスの儀礼論的ないしは社会言語学的な側面で、後者はポライトネスの語用論的な側面でかかわるし、「行為者は規範に従いながら行為すると同時に、自らの意図の下に振る舞いを選択し、その振る舞いを選んだことによって生じる『含み』としての対人配慮を伝達することで、相手と関係づくりに積極的に参与していくのである」とし、「井出はポライトネスにおける位相差を見落としている」と指摘し、「ストラテジー」の用法にも受動的／能動的の両面があることに注意を促している（滝浦，2005: 136-138）。

- 5) 林はフェイスを認知的部分（認知的フェイス）と情意的部分（情意的フェイス）に分け、前者が自身についての内省的意識に関わる構築物であるのに対して、後者は、前者についてのメタ意識に関わる構築物であるとし、前者はフェイスの主要な部分であるが、後者に内包される関係にあるという。さらに、認知的フェイスを私的フェイス（private face）と社会的フェイス（social face）に分け、私的フェイスは、人の感情、持ち物、性格、行動、考えなどいわゆる「パーソナリティ」についての認識を指し、社会的フェイスは、人の社会的な立場、地位や関係の隔たりなどいわゆる「アイデンティティ」についての認識とする。B&Lにおけるフェイスの性格は前者に相当するのに対し、Goffmanにおけるそれは後者に相当するという。日本語の敬語は社会的フェイスの志向する行為であり、B&Lの主張のような補償的行為ではない。この社会的フェイスの設定は個人主義的と批判されるB&Lのフェイスの概念の不備を補うものであるという（林，2005: 206）。
- 6) B&Lは、Griceの行動指針の逸脱する主たる動機がポライトネスであって、他の動機を否定しているわけではない。他の動機が存在の余地もあり、その一例として責任逃れという欲求があるとす（B&L, 1987: 95）。にもかかわらず、主眼はポライトな言語行動であるため、フェイスの概念は狭隘である。
- 7) インポライトネスの定義について、Locher & Bousfieldは言う。  
I take impoliteness as constituting the issuing of intentionally gratuitous and conflictive face-threatening acts (FTAs) that are purposefully performed. (Locher & Bousfield, 2008: 3)
- 8) ここでいう、より典型的なインポライトネスについて、B&Lは、話し手が聞き手の行為を妨害することを避けようとする意図がないということ潜在的に示すことによって、主に聞き手のネガティブ・フェイス欲求を脅かす行為として分類している（B&L 1987: 65-67）。しかし、筆者は聞き手の行為を妨害することを避けようとする意図がないというより、明らかに聞き手のフェイスを脅威するもしくは侵害する意図をもって発せられた発話を典型的なインポライトネスとして捉える。
- 9) Culpeper, Bousfield & Wichmannは言う。  
What is clear is that an impoliteness framework is not simply a mirror-image of a politeness framework, such as Brown and Levinson's (1987). (Culpeper, Bousfield & Wichmann, 2003: 576)
- 10) B&Lの、補償行為をせず、あからさまに言う（without redressive action, baldly）行為には、3つの状況が考えられ、1つ目は、緊急時や効率性のためであり、2つ目は、聞き手の利益になる申し出、依頼、提案のように、聞き手のフェイスを脅かす度合いが非常に少なく、また話し手にとっても大きな負担にならない場合、3つ目は、話し手と聞き手の力の差が明らかな場合であるという（B&L, 1987: 69）。ところが、B&Lの指摘以外に補償行為をせず、あからさまに言う例（通常の喧嘩）をわれわれは容易に思い出すことができる。
- 11) 私たちは親しい友達に対する振る舞い、上司に対する振る舞い、先輩に対する振る舞い、全然知らない人に対する振る舞いなど、それぞれの他者に対する振る舞い、すなわち他者に対する異なる立場をもつわけである。相互の立場の認識は言語表現に適用され（例えば、敬語を用いるか否かなど）、自己と他者との社会的要因（対

- 人関係及び利害関係など)を踏まえた振る舞いの調節としての言語表現を用いる。
- 12) ここで重要なのは、「自己志向」という欲求が必ずしもわれわれを否定的な方向のみに働きかけられることはないということである。例えば、学校のクラスにしる、その後の社会活動のクラスにしる、私たちの自己志向に対する欲求が存在しなければ、そのクラス及び社会活動というものは非常に低い水準の効率性を示すに違いない。さらに、人々の傲慢さ・競争心という欲求(他人に負けたくない、他人の上に立ちたいという欲求)があるからこそ、自分自身の向上心を上げることができ、ついに自分の目標を成し遂げるわけである。つまり、人間の行動は刺激に対する単なる反応として生じるものだけではなく、刺激を捉えなおし、それを再構成した上で、自己を作り出す主体性と社会性を併せ持ち、調節を行う。したがって、自己志向に動機づけられた欲求が必ず否定的な方向のみにわれわれを導き出すということはない。
- 13) なぜ、そのような現象がよく見られるか。われわれには互いの望ましい振る舞いのあり方の共通認識がある。故に、親しい間柄では直接、相手の立場を脅かすことがあっても忠告すべきであるという認識が好まれるわけである。例えば、友人の間違った行動を止めるために、「バカ、そんなことしちやダメだよ」と言えるのは、望ましい友人関係の共通認識に支えられているからである。
- 14) ただし、B&L は侮辱するための予想外のストラテジー (use of non-expectable strategy to insult) として、もし話し手が過剰にポライトである (W<sub>x</sub> を過大評価する) と、話し手は、社会的距離 (D) もしくは力関係 (P) の値が実際よりも大きいと暗に伝えることによって、聞き手を侮辱する (もしくは聞き手の気持ちを傷つける) ことになるかもしれないと指摘はしているものの、詳細なことは言及していない。One final type of exploitation of the politeness strategies should be mentioned: if S is too polite (overestimating W<sub>x</sub>) he may insult H (or simply wound his feelings) by implying that D or P (H) is greater than it is. (B&L, 1987: 229–230)
- 15) Leech は、聞き手の行為によって何らかの効果が生み出されるよう意図されている発話内行為を行為賦課型とする。すなわち、命令すること、指揮すること、要請すること、助言すること、推賞することなどがその例である (Leech, 1983/1987: 151)。Searle が取り上げた「行為指示型」(directive) という用語を「直接的及び間接的発話内行為」(direct and indirect illocutions) と関連して用いる場合の混乱を避けるために、Leech は行為賦課型とする。詳細は Leech (1983/1987) を参照されたい。
- 16) 行為拘束型は、話し手に(程度の差こそあれ)何らかの未来の行為に対して責任を持たせる発話内行為である。たとえば、約束すること、誓うこと、提供すること。これらの行為は競合型(発話内行為的ゴールが社会的目標と競合する場合を指す。例えば、命令することなど)というよりは懇親型(発話内行為的ゴールが社会的目標と一致する場合を指す。提供することなど)の傾向をもち、話し手以外の誰かのために遂行される。
- 17) 表出型は、その発話内行為が前提としている事態に対する話し手の心理的態度を表現するか、または知らせる機能を有している。感謝すること、詫びること、とがめること、弔慰することなど。行為拘束型に似て、これらは懇親型の傾向があり、それゆえ本質的に丁寧である。しかしながら、「とがめること」や「非難すること」などの表現については、それとは逆のことが言える。断定型とは、話し手に、表現された命題の真理値に対して責任を持たせることである。たとえば、陣述すること、暗示すること、自慢すること、不平を言うこと、報告することであり、こうした発話内行為は、丁寧さに関して中立的である傾向にあるとする。
- 18) 本稿の社会的規範とは、宇佐美のいう、すべての言語社会に存在する、文字通り規範的、慣習的な言語使用のこととして「社会言語学的規範や慣習に即した言語使用」を指す。詳細は宇佐美 (2001: 52–54) を参照されたい。では、社会的規範がわれわれの言語行動の選択及び解釈に如何なる影響を与えるのであろうか。中村は、

個人の感情はその属する集団の共同感情によっておのずと方向づけられ、型を与えられているという（中村，1975: 160）。すなわち、われわれは社会構成員として言語行動の選択及び解釈の尺度は、否応なしに当のおかれている社会的規範に照らし合わせ、判断・評価される故に、社会的規範は言語行動の分析に欠かせない。

## 文献

- Austin, John L. (1962). *How to Do Things with Words*. Oxford: Harvard University Press.
- Brown, Penelope, & Levinson, Stephen C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Culpeper, Jonathan (1996). Towards an anatomy of impoliteness. *Journal of Pragmatics*, **25**, 349–367.
- (2010). Conventionalised impoliteness formulae. *Journal of Pragmatics*, **42**, 232–245.
- , Bousfield, Derek, & Wichmann, Anne (2003). Impoliteness revisited: with special reference to dynamic and prosodic aspects. *Journal of Pragmatics*, **35**, 545–579.
- Eelen, Gino (2001). *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Goffman, Erving (1982). *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Pantheon Books. (浅野敏夫訳 (2002). 儀礼としての相互行為—対面行動の社会学— 新訳版, 叢書・ユニベルシタス 198 法政大学出版局)
- Grice, Paul H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge: Harvard University Press. (清塚邦彦訳 (1998). 論理と会話 勁草書房)
- 林宅男 (2005). フェイスの考察—普遍的ポライトネス理論の構築に向けて— 英米評論, **19**, 191–220.
- 井出祥子 (2006). わきまへの語用論 大修館書店
- 今野敏彦 (1988). 蔑視語—ことばと差別— 明石書店
- Lakoff, Robin (1973). The logic of politeness: or minding your p's and q's. *Chicago Linguistic Society*, **9**, 292–305.
- Leech, Geoffrey N. (1983). *Principle of Pragmatics*. London: Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳 (1987). 語用論 紀伊国屋書店)
- Limberg, Holger (2009). Impoliteness and threat responses. *Journal of Pragmatics*, **41**, 376–394.
- Locher, Miriam A., & Bousfield, Derek (2008). Impoliteness and power in language. Bousfield, Derek, & Locher, Miriam A. (Eds.), *Impoliteness in Language: Studies on its Interplay with Power in Theory and Practice*. pp.1–13. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Lovejoy, Arthur O. (1961). *Reflections on Human Nature* Baltimore. Baltimore: The John Hopkins Press. (鈴木信雄・市岡義章・佐々木光俊訳 (1998). 人間本性考 名古屋大学出版会)
- Matsumoto, Yoshiko (1988). Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics*, **12**, 403–426.
- メイナード・K・泉子 (2000). 情意の言語学—場交渉論と日本語表現のパトス— くろしお出版
- Mead, George H. (1924). The genesis of the self and social control. *International*

- Journal of Ethics*, **35**, 227–251. (船律衛・徳川直人訳 (1991). 社会的自我  
恒星社厚生閣)
- 三牧陽子 (2008). 会話参加者による FTA バランス探求行動 社会言語科学,  
**11**(1), 125–138.
- 南不二男 (1987). 敬語 岩波書店
- 三宅和子 (1994). 日本人の言語行動パターン—ウチ・ソト・ヨソ意識— 筑  
波大学留学生センター日本語教育論集, **9**, 29–39.
- 中村雄二郎 (1975). 感性の覚醒 岩波書店
- Searle, John R. (1969). *Speech Acts: an Essay in the Philosophy of Language*.  
Cambridge: Cambridge University Press. (坂本百大・土屋俊訳 (1986). 言語  
行為—言語哲学への試論— 勁草書房)
- (2001). *Rationality in Action*. Cambridge: Massachusetts Institute of  
Technology. (塩野直之訳 (2008). 行為と合理性 勁草書房)
- 滝浦真人 (2005). 日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討— 大修館  
書店
- 宇佐美まゆみ (2001). 談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—  
国立国語研究所 (編) 第7回国立国語研究所国際シンポジウム報告書 凡  
人社, pp.9–58.
- (2006). 談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義 宇  
佐美まゆみ (編) 言語情報学研究報告 13 自然会話分析への言語社会心  
理学的アプローチ 東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプ  
ログラム 言語運用と基盤とする言語情報学拠点 pp.229–243.



## **Linguistic Behavior in Interaction: Orientations to Self and Others vs. Social Factors Motivating Linguistic Behavior**

**HA Jeong-II**

The purpose of this research is to construct the new framework enabling us to capture and describe impoliteness as well as politeness. Based on the theories of politeness and impoliteness proposed in Brown & Levinson (1987), we investigated the causes for selecting and interpreting linguistic behavior in human interaction. We first made a distinction between the psychological motives toward ourselves and those toward others (orientations to self, and others) as internal causes, and then pointed out the social factors motivating linguistic behavior as the external causes affecting the internal ones, discussing the interrelationship between the internal causes and the external ones.

Since each of us and others have mutually dependant and coexistent in our society, the psychological motives for linguistic behavior as the internal causes are divided into those for ourselves and for others.

We have both self-oriented intention and others-oriented one. The former secure our own territory and favor more consideration of ourselves than of others, and the latter seek affirmative relations to others and respects harmony with others. As the social factors in the linguistic motives as the external causes affecting the internal ones, we pointed out power relationship, social distance, interests, and social standard. To adjust the self- and others-oriented motives as the internal causes to the social factors in the motives for linguistic behavior as the external causes, a behavior (*hurumai*) is selected then and there.

We expect that the linguistic behavior, including the motives in the impoliteness strategy proposed in Culpeper (1996), can be comprehensively studied in terms of the self- and others-oriented standpoints, which were accommodated from the concept of face, proposed in Brown & Levinson (1987)'s politeness theory.

**Key words:** orientations to self and others, behavior, interests